

前方照応代名詞 *it* と *that* の選択についての一考察

中村 聡

0. はじめに

日本の英語教育では、伝統的に *it* と *that* はともにソレと訳されることが多いため、前方照応 (anaphoric) 指示の場合は、両者に互換性があると考えている英語学習者は意外に多い。また、英語を使い慣れた人でも両者の選択基準について改めて問われて、明解な答えを示せる人はほとんどいない。中野 (1981) も、このような *it* と *that* の区別ははっきりせず、日本人学習者にとってまぎらわしい、と述べている。筆者が接した英語辞書や文法書にも、両者の違いについての十分な説明は見られない。たとえば、Leech & Svartvik (1975) は、

(1) A: She's having a baby.

B: How do you know a. *that*?

b. **it*

において、*it* を *that* の代わりに用いることはできない、と述べているが、その理由には触れていない。

本稿で取り上げる Kamio & Thomas (to appear) は、両者の意味機能上の相違を語用論的に説明している貴重な存在の論文である。彼らの分析を用いれば、(1) のような言語事実は十分に説明が可能である。しかしながら、彼らの主張のみで、*it* と *that* が前方照応的に使われるすべての用例を説得力をもって説明することはできない。本稿では、彼らの研究成果と問題点を考慮に入れ、*it* と *that* の本質的相違に基づいた新しい視点を提示し、この視点に立てば、照応的用法だけでなく直示的 (deictic) 用法をも含めて説明できることを主張する。

1. Kamio & Thomas (to appear) の理論

本節では、Kamio & Thomas (to appear) で示されている考え方を概説する。

1.1. 「既獲得知識」 (Prior Knowledge)

it と that の指示特性 (referential properties) の違いの1つとして、Kamio & Thomas は、it の指示対象 (referent) は話し手にとって「既獲得知識」 (prior knowledge) でなければならない、と主張する。既獲得知識とは Kamio & Thomas の用語で、談話 (discourse) に導入される前から話し手が既に持っていた情報のことである。これに対して、that にはこのような制約はなく、既獲得知識も話し手にとってまったく新しい情報も指示対象とすることができる。¹⁾

(2) [A rushes into the room excitedly]

A: Guess what! I just won the lottery!

B1: *It's amazing!

B2: That's amazing!

(Kamio & Thomas (to appear))

(2) において、B は A が宝くじに当たったことを知らないと考えられるので、A の発話は B にとってまったく新しい情報である。よって it をここでは使えないことになる。しかし、もし B が既に「A が宝くじに当たった」という情報を他から得て知っているならば、(3) のように it を用いることができると説明される。ここで B は it の代わりに that を用いることもできる。

(3) A: Guess what! I just won the lottery!

B: (Yes,) it's amazing! I heard about it on the radio and I've invited everyone on the block to our house for a party!

(Kamio & Thomas (to appear))

次の(4)は it と that が目的語になっている例であるが、同様に上述のルールが働いているとされる。

(4) A: Fred arrived even later than Sally.

B1: I know that.

B2: I didn't know that.

B3: I know it.

B4: *I didn't know it.

(Kamio & Thomas (to appear))

(4)において、that は B が A の発言に関して既獲得知識を持っている場合(B1)にも、持っていない場合(B2)にも用いることができる。一方、B4 で it を用いれば大変妙な感じを与えると Kamio & Thomas は指摘する。B は A が述べた事柄を知らなかったのであるから、そのことに関して当然、既獲得知識がないと考えられるからである。

Kamio & Thomasは、既獲得知識は比較的新しく得られた情報 (relatively recently-acquired information) も含むとしている。

(5) [Alice and Carl are long-term housemates, whose relationship has been troubled recently. Alice comes home one evening to confront Carl with some news.]

"Carl, I have something important to tell you. Mark called me into his office this morning and said he wanted to give me Gino's job. He made me a great offer and I accepted it. But of course I'll have to move to San Francisco."

Carl stared at her in silence for a long moment. Then forcing himself to speak calmly, he said softly, "I hope it will make you very happy, my dear."

(Kamio & Thomas (to appear))

(5) において、明らかに Carl は Alice が口に出す前に、Alice のニュースについて既獲得知識を持っていない。にもかかわらず、彼は彼女の述べたことを指すのに it を使っている。この一見すると先に挙げた基準には当てはまらない事実は、Kamio & Thomas によって次のように説明される。すなわち、Carl が Alice の陳述を聞いてから彼自身の発言までの間に “long moment” があるので、Alice が述べたことは Carl にとってまったく新しい情報ではなくなるのだ、と Kamio & Thomas は述べている。

ここまでの Kamio & Thomas の分析は、節先行詞 (clausal antecedent) をとる it と that の用法についてであったが、彼らはさらに、両代名詞が単純名詞先行詞 (simple nominal antecedent) をとる例にも分析を広げている。

(6) First put the vase on a table, then take a picture of (a) it. [=vase]

(b) that.[=table + vase]

(7) First put a vase on the table, then take a picture of (a) it. [=table]

(b) that.[=table + vase]

(Kamio & Thomas (to appear))

これらの例において、it と that ではそれぞれの指示対象 (referent) が異なると Kamio & Thomas は指摘している。つまり、it の指示対象は定冠詞を伴った名詞句となるが、それはその指示対象について、話し手が既獲得知識を持っているからである。一方、that の指示対象は既獲得知識である必要がないので、vase + table を指していると説明される。同様の既獲得知識に基づく説明は次の(8)と(9)でも試みられている。

(8) The authorities regretted the strike, but it was inevitable.

(9) The authorities regretted the strike, but that was inevitable.

(Kamio & Thomas (to appear))

(8) において、it は the strike を意味し、(9)では、that は the authorities' regret of the strike を意味する。すなわち、regert の目的語の

the strike は話し手にとって既獲得知識であるから it で指示できるが、最初の等位項 (conjunct) で述べられていることは既獲得知識ではないため、it は使えないと Kamio & Thomas は説明する。

1.2. 「拡散指示」 (Wide Reference)

次に、Kamio & Thomas の指摘している it と that のもう1つの指示特性について概説する。彼らの主張によると、that はその指示対象を狭く特定し (narrowly specify), 他方 it は広く指示する (refer broadly) 。言い換えれば、that は指で指し示すように示し (point), it は喚起する (evoke) という。⁹ この両者の違いは名詞句 (noun phrase) よりも節 (clause) を指示対象とする場合により多く認められるという。次の例を見られたい。

- (10) Sonja was born out of wedlock, but I never revealed (a) it to her.
(b) that to her.

(Kamio & Thomas (to appear))

(10)で、it は「Sonja が嫡出であった」という命題だけでなく、それに関する事実や出来事 (a set of related facts and events) を広く示す。たとえば、「Sonja は私生児であったということ」「彼女の母親と首相との情事に関する話」「そのことに端を発した危険な国家間の陰謀」等を示すことができるという。これに対して、that には it のようにさまざまなことを喚起する効果はなく、ただ単に「Sonja の両親は彼女が生まれた時に、結婚していなかった」ということを意味する、と Kamio & Thomas は主張する。

先に挙げた(5)の例についても、既獲得知識という視点とは別に、it の拡散指示 (wide reference) 性が見られるという。Carl の I hope it will make you very happy, my dear. という発言において、it は「この転勤は君にとって重要な昇進を意味する」「君はサンフランシスコでひとりで新しい生活を始めるのだろうか」「そこで新しい友人ができるだろうか」「この転勤は2人の関係に大きな変化を与えるだろう」等を示すという。

2. Kamio & Thomas (to appear) の問題点

以上 Kamio & Thomas の挙げる *it* と *that* の2つの指示特性について紹介した。本節では、彼らの2つの視点では説明が困難な実例を挙げ、問題点を指摘したい。

2.1. 反例

まずは反例と思われるものを列挙する。

(11) Dunham: Right now I'm the one that's having a problem.

Cummings: How so?

Dunham: I'd rather live on my own than with my parents, who are not easy to live with.

Cummings: I see. And you're concerned about how *it* will affect your mom.

(ALI:1988 からの例である。以下 (15) まで同様)

(12) Jeanne: What would you like to get for Christmas this year?

Marielle: I'd like to get some ski clothes. What about you?

Jeanne: Well, every year I ask for records, but no one ever buys me any.

Marielle: Maybe someone will surprise you this year and buy you records.

Jeanne: I doubt *it*. I feel like my family and friends never think about what I want. They just get me something that they like.

(13) Teacher: ... At home I'd like you to read the next story as carefully as we have done in class.

Jose: Suppose we try *it*, but we make a lot of mistakes?! ...

(14) Howard: ...By the way, if you ever need my help, just let me know.

Thompson: Thanks, Pat. I'll keep *it* in mind.

(15) Marsha: Well, I guess I'll see you in computer class tonight,
right?

Naoko: *It* depends. Aki won't be home tonight, so I have to find a
babysitter.

(16) A: Excuse me, sir. I left my report at home.

B: *It's* OK. You can bring it tomorrow.

以上はすべて節先行詞をとる *it* の例であるが、これらの *it* は Kamio & Thomas の理論では説明が難しいと筆者は考える。まず既獲得知識の観点に立てば、*it* の指示対象について *it* を用いている話し手は既に情報を持っていなければならないことになる。しかし、個々の例を観察すれば、*it* の使い手にとって、その話し相手が直前に述べたことはまったく新しい情報であることは明白である。よって Kamio & Thomas の主張に従うならば、これらの例では *that* のみが使われねばならないことになってしまい、(11)-(16) の事実と反する。(16)を例にとれば、おそらく今日提出することになっていたレポートをすっかり家に忘れてしまったことに対して、A は B に謝っているのであるが、B にとって A がレポートを忘れたという情報はまったく新しいもので、かつほとんど間を置かずに *It's* OK. といっているのである。

既獲得知識で説明できないならば、拡散指示の視点ではどうか。この視点に立つならば、*it* は指示対象に関連する様々な事柄をも含んで指示していることになる。(11)を例にとって考えてみよう。ここでは *it* は Cummings によって Dunham の述べたこと、すなわち、Dunham が両親と離れてひとり暮らしをしたいということを指しているが、拡散指示の観点から説明を試みようとするならば、*it* はこの情報について、たとえば、「Dunham の家では最近、家族関係がうまくいっていないのだろうか」「なぜ Dunham はひとりで暮らしたいのだろうか」「そういえば彼女、少しやせたようだ」といった事柄をも指示することになってしまう。が、そのような説明が成り立たないことは、コンテキストを観察すれば明らかである。つまり、*it* の指示対象の Dunham の発言内容を Cummings

は聞いたばかりであり、その後間を置かずに it を含む発言をしているのだから、Dunham の述べたことに対して上のようなことを思い浮べるような時間的、心理的余裕があるとは考えられない。やはり Dunham の陳述をそのまま指しているとはか思えないのである。筆者のこの指摘は(12)-(16)の例にも当てはまると考えられる。本節のここまでの考察で、Kamio & Thomas の言う既獲得知識と指示拡散という2つの特性が当てはまらない実例が、例外ということでは説明できないほどに存在するということと言える。³⁾

2.2. 再検討を要する箇所

続いて、Kamio & Thomas の説明で当を得ていないと思われるところを指摘したい。

(17) [A middle-aged father and his 25-year-old daughter are observing a young man on the street below pushing a baby stroller with an infant inside, evidently his own child.]

Father: Look at that! There's some young guy taking care of his own kid.

Daughter: You see a. that a lot around here, Dad.

b. it

(Kamio & Thomas (to appear))

この例における Kamio & Thomas の説明では、拡散指示の観点から、(17b)のように it 使われるならば、それは指示対象を拡散させ、その辺りの地域での育児習慣について娘がより漠然とした (general) コメントをしていることを意味するという。つまり「この町では父親が子供の世話の責任を持つことは珍しいことではなく、それは赤ん坊を乳母車で外に連れていくことに限られない。父親たちは食事を与えたり、入浴させたり、その後片付けもする。こういったことはこの辺では稀なことではない」ということを意味する、と Kamio & Thomas は述べている。この説明に関しても異論がある。(17)で使われている it は単に父親の発言の中の

Look at that! の that を指示しているのであって、前出の that のくり返しを避けて使われているのではないか。つまり、it の先行詞は that であって、その後が続く父親の発言内容ではない。そう考えるならば、(17b) の it に、Kamio & Thomas の言うような指示拡散現象が見られるという説明は当を得ていないことになる。

2.3. 英語母語者の見解との不一致

ここから先は、Kamio & Thomas の説明の中で、筆者が行なった英語母語者へのアンケート調査結果とは一致しなかった箇所について考察してみたい。⁹

(18) A: My daughter Paula has been offered an excellent job at school in Virginia.

B: Oh, I'm glad to hear it.

(19) A: My dog was just bitten by a poisonous snake!

B: I'm sorry to hear it. Will he be all right?

(18), (19)において、A の述べたことは B にとって全く新しい情報であることは明らかであるが、B は A が述べたニュースに心から関わっているということ (sincere involvement) を伝えるために、そのニュースが B の中に知識として貯えられているかのように、無意識のうちに it を使って指示しているのではないかと Kamio & Thomas は言う。しかし同時に彼らは、このような言語現象は B の A への連帯感 (solidarity) を表そうとして働いている、語用論的動機による歪曲 (pragmatically-motivated falsification) であると述べている。そして、このような it の使用は I'm glad to hear it. や I'm sorry to hear it. のような準慣用句的表現 (quasi-idiomatic expression) に限られていて、(18)で B が It's wonderful news! や Oh, is it true? のようには言えないし、(19)で B が It's terrible! や I didn't realize it. 等と言うことも容認されないという。が、その理由について Kamio & Thomas は何も述べていない。

ここで指摘しておく必要があるのは、(18), (19)では、B が A の発

した情報を自分に関わり深いものとして it を使って指示している、という Kamio & Thomas の見解についてである。(18)で Bは、A が自分の娘が良い職を得られ満足していることについて、我が事のように感じていることを示すために it を使っている、と Kamko & Thomas は述べているが、これは筆者のインフォーマントへのアンケート結果とは全然一致しない。アンケートに(18)、(19)の会話をそのまま載せ、it と that のどちらが適当か、it と that ではどのような意味的相違が感じられるか、を問うたところ、that の方が適当であり自然だとすべてのインフォーマントが答えている。it も可能ではあるとする人もいるが、it は不自然だとする人がほとんどである。そして両代名詞の相違について記述してくれた人の見解は、that の方がより感情が込められている (more feeling, evoking feelings), 共感的 (sympathetic) 等であり、it の方にはそのようなものが感じられない、ということで一致している。it を使えば指示対象となる情報に関心を寄せていないように聞こえる、と述べている人もいる。筆者の調査結果から得られたこのような事実は(18)、(19)についての Kamio & Thomas の説明とは真っ向から対立するものである。次節で、筆者の新視点を支持するものとして、さらに検討を加えたい。

次に、名詞的先行詞をとる it と that についての Kamio & Thomas の説明を取り上げたい。(6)、(7)の例を振り返ってみよう。

- (6) First put the vase on a table, then take a picture of (a) it. [= vase]
(b) that. [= table + vase]
- (7) First put a vase on the table, then take a picture of (a) it. [= table]
(b) that. [=table + vase]

(6)、(7)で、it の指示対象は定冠詞の付加された、すなわち、既に談話の中に導入された名詞句であり、that の指示対象は既獲得知識である必要がないので、発話と同時に導入された vase と table の両方を指すことができる。これが Kamio & Thomas の解説であった。これについて筆者のインフォーマントへのインタビューの結果と照らし合わせて検討する。

まず Kamio & Thomas の it の指示対象は定冠詞付きの名詞句、と

いう主張についてであるが、必ずしもそうとは言えないことが数人のインフォーマントによって指摘されている。すなわち、(6)においては Kamio & Thomas の言うように *it* は常に *the vase* を指すが、(7)で *it* は、*the table* より *a vase* を指すととる方が自然だとする見解である。このことは Kamio & Thomas の *it* に関する説明の妥当性を揺さぶるものである。

次に(6)、(7)の *that* の指示対象は *table + vase* であるとする Kamio & Thomas の主張についてであるが、この点に関してはインフォーマントの見解と一致している。しかしこの事実の理由として、*that* の指示対象は既獲得知識である必要がないから、とする説明は不十分である。この Kamio & Thomas の説明は、裏返せば、*that* の指示対象は既獲得知識であってもいいということの意味する。よって(6)では、*that* が *the vase* のみを指し、(7)では、*that* が *the table* のみを指すことも可能ということになる。しかしそのようなことは、少なくとも(6)、(7)に関する限り考えにくい、というのがインフォーマントの一致した見方である。

最後に(8)、(9)の例についてのインフォーマントの見解を示しておく。

(8) The authorities regretted the strike, but it was inevitable.

(9) The authorities regretted the strike, but that was inevitable.

この2つの例においては、Kamio & Thomas の説明とインフォーマントの見解はほぼ一致したが、(9)で *that* が *the strike* のみを指示することも可能ではある、と指摘する人もいた。

(6)-(9)についての以上の考察から、既獲得知識の見地からこれらの事実を説明しようとする Kamio & Thomas の試みは説得力に欠ける、と筆者は指摘したい。⁹⁾

3. 提案・説明

本節ではまず, it と that の照応的用法を両代名詞の本質的相違と関連づけて論じる。次に it と that の語用論的意味作用を挙げ, 実例に触れながら考察する。また, これらの意味作用の見地から, Kamio & Thomas の用例も再観察してみたい。

3.1. 指示代名詞と人称代名詞

it と that の意味機能的相違について考えるためには, まず両者の本質的な違いから考察を始める必要がある。両者はともに代名詞であり, 照応用法において統語的によく似た振る舞いをすることが, 両者の意味的相違を不明確にしているのだが, 文法カテゴリーでは it は人称代名詞 (personal pronoun), that は指示代名詞 (demonstrative pronoun) という別々のカテゴリーに分類されていることに注目することが必要である。

英語の三人称代名詞の本質は, 原則として前出の名詞句の代用であって, 直接に現実の何かを指して言うのではない。コンテキスト内で既に言及された名詞句の繰り返しを避けるために用いられる, すなわち名詞句を代示する働きをするのである。他方指示代名詞は, それが用いられる場面において, その指示対象となる事物が先に言及されていなくても, 直接に指示することができる。

ここで注意することは, that は指示詞であるから, 対象を指で指し示す (point to the referent) という動きを伴い, それとともに指示対象に向けて, 話し手および聞き手の注意や関心が集中するという作用が生じるということである。この作用を指示代名詞の指示集中作用 (pointing force) と呼ぶことにする。この力は it を使って指示する際には生じないことは言うまでもない。よって that は指示集中作用を伴って指示し, it はただ単に対象を指示している, という両者の違いも筆者は指摘したい。ここで直示的用法の次の例を見られたい。

(20) A: What's that?

B: You mean that one? It / That is a horse and buggy.

(20)で B は A が使った指示代名詞 that を受けて that の代わりに人称代名詞 it を使っている。ここで it が that を代示しているという機能とともに、もうひとつ指摘できることがある。それは、A が that を使って指示しているときには、A と B の視線と関心が that の指示対象に向かって集中していることは明らかであるが、B が it を使っている時点では、A と B の関心と注意は horse and buggy という名称の方に向けられている、と解釈できることである。(20) では that の使用も自然である。その場合には、A と B の関心と注意がまだ that の指示対象にも強く向けられていると解釈できる。

3.2. 直示的用法の転用

本稿では既に述べたように、直示的用法用法の延長に it と that の照応的用法があるものとみなして、以下の考察を進める。上述のように、that は指示詞であるので、指示対象を指示集中作用によって直接に強く指示するのに対して、it にはそのような力は感じられず、ただ指示対象を軽く指示しているのである。このとらえ方が照応的用法にも適用できることが、次の例の観察を通じて示される。

(21) A: Where in the States are you going?

B: I'm going to San Diego.

A: Oh, really? That's /?? It's where I come from!

(22) A: Let's go for a drive together, okay?

B: Oh, I'd like to, but I have something to do today.

A: What is that / it?

(21)において A が that または it を使って指示しているのは San Diego という名詞句である。どちらの代名詞を使っても文法的には可能であるが、ここではやはり、that の方が自然である。コンテキストから明らかのように、A は自分の出身地が B の口から思いがけずに出たので、ある種の驚きや感動を感じている。よって、San Diego を指示集中的に that を用いて指示するのが当然と言えよう。仮に it を使えば指示

対象への A の関心が感じられず不自然になってしまう。(22)では、A は B の発言の中の something を it と that のどちらを使ってもごく自然に指示することができる。筆者の経験では、このようなコンテキストでは it を使う人が多いように思われるが、that を使って強く指示すれば、指示対象である something に対する A の関心が強調されることになる。

3.3. 副次的作用

本節において筆者が提示してきた、that は直接に明確に指示集中作用を伴って強く指示するが、it にはそのような働きはなくただ軽く指示する、という意味的相違は、語用論的副次作用を生むことが指摘できる。Kamio & Thomas の主張する既獲得知識・拡散指示という2つの意味特性も、以下に示す作用の中に含まれるものであって、あくまでも it と that の本質的意味特性の副次的効果とみなされるべきである。次に言及する2つの作用は独立したものではなく、互いに関連しあっているということを強調しておきたい。以下に示す分類もそれぞれの境界がはっきりしているわけではない。ある作用が顕著な場合にも、もうひとつの作用が多かれ少なかれ働いているのである。

3.3.1. 強調指示・平静指示

that を使えば、聞き手あるいは話し手自身の陳述を、話し手が興味・関心・驚きといった感情をもって指示することができるが、it を使った場合は、そのような感情は強調されない。次の(23)-(25)は it と that の相違がはっきりと見られる例である。ここでも筆者のインフォーマントの見解を重視して考察する。

(23) A: My daughter Paula has been offered an excellent job at school
in Virginia.

B: Oh, I'm glad to hear? it/that.

((18) の例に基づく)

(24) A: My dog was just bitten by a poisonous snake!

B: I'm sorry to hear ??it/ that.

((19) の例に基づく)

(25) A: Where were you yesterday? We missed you.

B: I'm sorry I was absent. I felt terrible yesterday.

A: Oh,* It's/That's too bad. Did you go to the doctor?

(ALI: 1988 の例に基づく)

(23)-(25) を観察して気づくことは、thatの方が圧倒的に選ばれているということである。また、itの方がthatよりも適当と答えたインフォーマントは1人もいなかった。この事実は上で指摘した it と that の性質の相違に基づいて説明できる、と筆者は主張する。すなわち、前節で触れたことと重なるが、(23)-(25)における A の発言内容はすべて、B にとってはある種のインパクトを与えるものなので、B は指示対象である A の発言内容を共感や驚き等の感情を持って指示することが自然であり、その作用は that を使って直接に明確に指示することによって生じるのである。これに対して、itの方はthatのような指示作用を持たず、ただ単に A の発言を指していることになるので、Aの発した情報に関心を寄せていない、他人事のように聞こえる、という数人のインフォーマントの指摘するような意味合いが生じると説明できる。たとえばある人は(23)について、itを用いれば、BはAの娘に良い印象を持っておらず、その娘がいなくてもまったく困らない、というようなことが感じられると述べている。

第1節で言及した、Kamio & Thomas の既獲得知識の視点から説明が可能な例は、すべてこの強調指示・平静指示という視点から説明することができる。すべての例をここで取り上げる余裕はないが、たとえば、(2)でIt's amazing!は不適当でThat's amazing!が自然なのは、BがAの宝くじに当たったという情報を驚きの感情を持って指示しているからであり、(3)でIt's amazing!が可能なのは、BはAが宝くじに当たったことを知っていたので、比較的平静に指示したからであると言える。もちろん、ここでthatを使えば、まったく新しい情報ではなくても、BがAの好運に対して共感・感嘆を表していることになる。また、(4)においてI didn't know it.が不自然なのは、知らなかった事柄に対して興味

や関心を向けないのは変であると感じられるからである。

3.3.2. 特定・非特定

次に, *that* は指示対象を指で指し示すように特定し (*specify*), *it* は明確な指示対象を持たず, 不特定に漠然と示す (*generalize*), という作用が挙げられる。*it* の作用についてさらに言えば, 指示対象を不明確にするということは, 言い換えれば, 対象をぼかすことであり, ぼかすことによって対象の周りがかすむことになる。この状態が Kamio & Thomas の言うところの指示拡散につながると考えることができる。ここで筆者の指摘する作用は, Kamio & Thomas の主張する意味特性と, *that* に関しては一致するが, *it* については多少異なる。Kamio & Thomas の挙げる (10) および (5) の *it* は指示拡散現象の強いものとしていたが, 筆者の示す次の例の *it* は, そのような強い指示拡散とは異なる性質を有しているのではないか。

(26) Doug: Sir, may I speak to you honestly?

Waters: Dertainly, Doug. What is it?

(ALI:1988)

(27) A: Have you heard about Tim? He had to rush to the emergency room.

B: Really? I hope it's nothing serious.

(26)では *it* の指示対象ははっきりとは示されていないが, 筆者のアンケート調査の結果, *your problem* や *the thing you want to talk about* を指していることが分かる。(27)でも明確な指示対象は示されていないが, *his condition* や *his problem* を指していると言える。このような現象には, 不明確な指示対象を漠然とではあるが, 先行する発言の中から無意識に選び出すという *it* の働きが観察できる。*that* にはこのような働きがないことは, (26)と(27)のどちらも *that* の使用は不可能という, インフォーマントの意見から明らかである。

4. まとめ

本稿では, Kamio & Thomas (to appear) の研究成果と問題点を考慮し, 彼らの語用論的視点とは別に, 指示代名詞と人称代名詞の意味機能上の本質的相違, すなわち, *that* は指示対象を指示集中作用を伴って強く明確に指示すのに対して, *it* にはそのような力はなく, ただ対象を軽く指示しているという違いに基づいた視点から, *it* と *that* の前方照応的用法の説明・分析を試みた。しかし本稿では, Kamio & Thomas の理論では十分な説明が困難であった *it* と *that* に関するいくつかの言語事実にふみ込む余裕がなかった。これらについても, 筆者の提示した視点によって説明することが可能と予想されるが, 具体的には稿を改めて論じなければならない問題である。今後はより多くのデータに当たって, 本稿で提出した分析法の広範囲にわたる適用性を検証してゆきたい。

注

* 本稿の執筆に際して, 成城大学の吉田正治先生より貴重なご批判・ご意見をいただいた。この場をかりて感謝申し上げたい。また, 貴重な時間をさいて筆者のアンケート・インタビューに答えてくださった方々の中で, 特に Gary Manfredi, Gregory W. Kozlowski, Ray Ormandy の各氏には, その名を記してお礼のことばとしたい。

- 1) 従来 of 旧情報 (old information) と新情報 (new information) の概念とは一応区別されるべきである。というのも, この概念は言語学者によって定義もさまざまだからである。
- 2) 神尾 (1990) は Kamio & Thomas (to appear) の内容に触れ, *it* の特性については「指示拡散」, *that* については「指示集中」という表現を用いている。
- 3) (11)-(16) のすべてにおいて, *it* の代わりに *that* も可能であることが, 筆者の英語母語者へのアンケート調査の結果分かる。たとえば

(17)では、It's OK. でも That's OK. でも構わないという人がほとんどだった。ただし(12)では、that を認めない人が少数いた。全体的傾向として、すべての例において、it の方を個人的に好みよく使うという人の方が多かった。本稿では、このように it と thatの両方が同一コンテキストにおいて可能で、両者の意味機能的対立が顕著でない実例については議論する余裕がなかった。別の機会に譲りたい。

- 4) 10人の英語母語者から回答を得た。出身国はアメリカ合衆国(8人)、オーストラリア(1人)、カナダ(1人)である。
- 5) 本稿では残念ながら、このような言語事実を筆者の新視点から検討する余裕はなかった。今後の研究にゆだねたい。

参考文献

- American Language Institute (ALI) at San Diego State University. 1988. *NCB English Course*. Nippon NCB Company.
- 神尾昭雄. 1990. 『情報のなわ張り理論』大修館書店.
- Kamio, A. and M. Thomas. (to appear) "Some Referential Properties of English *It* and *That*." Kamio, A. and J. Whitman (eds.) *Function and Structure*.
- Leech, G. N. and J. Svartvik. 1975. *A Communicative Grammar of English*. Longman.
- 中野道雄. 1981. 『日英語対照研究』神戸市外国語大学研究叢書.